

## 「新文科建設」政策に対する教育現場の教師の捉え方

王金艶<sup>オウキンエン</sup>（城西国際大学）

本研究の目的は、中国の大学において「新文科建設」政策が推進され、日本語教育に関する学際的な専攻が開設されている現状の中で、現場の日本語教師たちがどのように考えているかを明らかにすることである。

「新文科建設」は、2019年、「時代と国家の発展の要求に適応した人材を育成するため」に、中国教育部をはじめ、13部門が共同で打ち出した「六卓越一拔尖」計画 2.0（中国教育部 2019）の一部である。その狙いは、「経済・社会に適応した人材を育成する」という大学の機能を向上させることにあった。「新文科」の構築に関しては、その構成要素を「伝統専攻の複合化」、「新設専攻の特色化」、「育成計画の立体化」及び「授業の知能化」の4つに大別し、さらに細分化している（劉 2020: 145）。また、中国の大学入学制度には振り分け政策がある。許（2019: 144）の調査では、大学3校で募集された日本語専攻の学生の内、約39%が本来希望していなかった日本語専攻に振り分けられた学生達であった。これは、日本語専攻の在り方を研究する上では看過できない側面である。

本研究では、「新文科建設」を背景とした、ある経済大学の日本語専攻の改革を紹介した上で、教師Aの捉え方をまとめた。教師Aが所属する大学は経済大学であるため、経済大学であるという特色と経済学科が有力であることを考慮して、「日本語＋経済学」という育成モデルが推奨されている。学生が経済学を副専攻として申し込んだ場合は、一年次後期から、2つの専攻を履修することになる。学生が副専攻を申し込まなかった場合は、そのまま日本語のみを学習する。教師Aは「（本来希望していなかった）日本語専攻に振り分けられた学生が、希望していた専攻を副専攻として学ぶことができ、学生の夢が守れるからいい政策だ」と語った。教師Aは「新」日本語専攻を作っていく若手教師として、学生のキャリアアップを考え、「新文科建設」を肯定的に捉えている。一方、学生が能動的に学習することが重要であることや、クラス運営上の問題などにも言及した。

「新文化建設」の動向の下、日本語学校を経ずに、直接日本の大学院に入学を志願する学生が増加すると予想されるため、中国の大学における「新文科建設」に関する研究は、日本の日本語教育界にも有意義だと思われる。同様に、これから中国で活動する日本語教師にとっても重要であろう。

### 引用文献

- 中华人民共和国教育部（2019）『教育部启动“六卓越一拔尖”计划 2.0 助力打造质量中国』
- 刘利（2020）「新文科专业建设的思考与实践：以北京语言大学为例」『云南师范大学学报（哲学社会科学版）』52: 143-148.
- 許晴（2019）『中国における日本語専攻学習者の動機減退構造：社会・教育環境との関連から』北海道大学. 博士(学術) 甲第 13628 号